

## Virginia Woolf の人生観について

久 米 清

Virginia Woolf について、沢山の批評家が、いろいろなことをいつています。例えばある批評家は Woolf 自身の sense of values を見出し(註1)、ある批評家は Chinese cyictism, mysticism, romanticism, and an enquiry which is strictly metaphysical について語り、またある批評家は、Bergson, Proust, Joyce, Freud の influence について語り、その他、a good Platonist であるとか、traditional British empiricism を見出すとか、Philosophy があるとかないとか、Pater や William James の影響を見出すとか、a typical melancholy English philosophy を見つけ出すとか……といった具合です。

このような項目を見ても、他の文学研究の場合と同様、Woolf の場合も、他の作家、思想家による影響、世界中の種々の思想との比較などによる研究方法が、有力な研究方法の一つであることが推察されます。

しかし、このレポートでは、その様な成果の二、三の助けを借りながら、Woolf の作品、特に、そのもつとも成功した作品の一つである、*Mrs. Dalloway* を読み、その中にもられた人生観について考えてみたいと思います。

Woolf の作品の主要な目的が、to convey a unified vision of life and experience (註2) であり、個々の characterization とか、たんなる impressionist として、美しい image を並べることにないので、人生観について考えることは Woolf の作品を解釈する一つの鍵ではないでしょうか。

*Mrs. Dalloway* は実に美しい image に満ちています。海や小鳥

や、様々の種類の花々。そしてそれから出来ている人生を、Mrs. Dalloway は愛しています。

the carriages, motor cars, omnibuses, vans, sandwich men shuffling and swinging; brass bands; barrel organs; in the triumph and the jingle and the strange high singing of some aeroplane overhead was what she loved; life; London; this moment of June.

(Mrs. Dalloway, Tokyo, Kenkyusha, p. 3)

Mrs. Dalloway はこの様に人生のあらゆるものを愛しているように見えます。

and of course she enjoyed life immensely.

It was her nature to enjoy..... ( P. 110)

このMrs. Dallowayがheroineであるこの作品は、きつと非常に美しく、歓喜し幸福にあふれているだろうと思われたにちがいありません。ところが、この作品には孤独や死の暗い影が一見した所、明るく、美しいものの背後にひそんでいるのです。

通常、反対のものと考へられている、花や小鳥などの美しいimageと孤独や死が何故共存している、あるいは共存しうるのでしょうか。

この疑問は、和歌や、俳句を作り、観賞してきた日本人には、実は疑問でもなんでもなく、ごく自然にうけとられるでしょう。和歌や俳句には、人間の孤独、淋しさ、悲しさを、自然の風景の美しさを通して、あるいは、風景とともに歌つたものが実に沢山あります。

社会を生き抜くことが困難であると感じられたり、人と人との conflict に傷つき、敗退し、人間を疎ましく思い、孤独を感じたり、近づく死におびえたりする時、人間、特に日本人は、自然の風物の美しさにひたり、観賞することで慰めを得てきました。この様な傾向は『古今集』以後日本の文学精神の中に大きな位置をしめてきました。

例へば新古今の

花さそふ比良の山風吹きにけり

漕ぎゆく舟のあと見ゆるまで

みよし野の高嶺のさくら散りにけり

あらしもしろき春のあけぼの

といった様な歌は『新古今』にはざらにある歌ですが、どちらも、たんに美しい風景を描いているだけですが、その美しい風景が桜が散るということによつて成立していること、つまり、風に散る桜によつて、ままならぬ浮世を連想させ、読むものに哀感を伝へます。この様な歌を読むことにより、あるいは、この様な歌が生まれる様な風土に生きることにより、日本人は、美しい風景から、たんなる喜びよりも、物のあわれを感じとるようにさへなりました。

駒とめてなほ水かはむ山吹の

花の露そふ井手の玉川

このような春の美しい叙景歌にさへ日本人は哀感のただよつてを知ります。

このような精神特性と Virginia Woolf のそれとは奇妙に似た一面を

もつてはいないでしょうか。つまり *Mrs. Dalloway* の哀感は、孤独や死によつておびやかされながら、例えば孤独を解決するのに他人の中に積極的に入つて行つて愛するとか、或いは憎むとかいうことをしないで、美しい風景を眺めることで解決しようとしている所から生まれているのではないのでしょうか。(勿論、『新古今集』は自然の風景の美くしさを歌っているのに対し、*Woolf* は自然のみでなく、上述した例でもわかるように、*London* という都会に見られる様々の風景や、家の中の日常のこまごまとしたものに美を見出していますが、これはたんに時代の変化にともなう素材の変化にすぎません。)

*Mrs. Dalloway* はこの様に、現実の確執から逃れ、現実の厚い壁と四つに取りくむことをしないで、そのぶ厚い壁を(頭の中で)バラバラにし、その美しい破片を集め、その美を眺めます。そうです、*Mrs. Dalloway* にとつて美とは現実の人間の中に入つてゆき、仕事をし、一緒に創造する時に感じる美くしさではなく、たんに眺められるものです。*Mrs. Dalloway* は、この作品全体を通じて、積極的な行動は何一つせず、ただ眺めているだけです。彼女がこの作品の中で殆んどただ一つ行動の名に値するものは *Party* を開くことですが、しかし、これも、人々への *offering* にすぎず、自分が積極的に参加するものではありません。

... as we are a doomed race, chained to a  
sinking ship ... as the whole thing is a  
bad joke, let us, at any rate, do our part;  
mitigate the sufferings of our fellow —  
prisoners ... decorate the dungeon  
with flowers and air-cushions ...

要するに、*Party* はこの世の牢獄を飾る花なのです、(そしてまた *Woolf* にとつては、彼女の小説がこの世の牢獄を飾る花であつたのではないでしょう

か。)

実際、Mrs. Dalloway は、行動の名に値する行動を殆んどしません。例へば、この作品の climax の一つである、Mrs. Dalloway が昔の恋人、Peter Walsh に会う場面。Peter が pocket-knife をいじつています(註3)。この pocket-knife は Peter 自身がいうように、Clarissa (Mrs. Dalloway) や Mr. Dalloway やその他の人たちに対する戦いを意味しています。Mrs. Dalloway を行動にかりたてようとするわけです。それに対し、Mrs. Dalloway は irrepressible irritation を感じます。彼女は行動にかりたてられることを、本能的に拒否しているのです。ついに、Peter は泣き出します。彼女は彼を引きよせて、キスします。そして非常な気安さを感じ、

If I had married him, this gaiety would  
have been mine all day! (P. 64)

と叫びます。しかし彼女は行動に移りません。

The sheet was stretched and the bed narrow  
(P. 64)

と思い、

Take me with you ..... (P. 65)

と衝動的に思うのですが、

.... then, next moment, it was as if the fine  
acts of a play that had been very exciting

とすぐ思い返すのです。彼女は決して行動に移りません。いぜんとして the bed narrow なのです。悲劇です。しかしこの悲劇は彼女を絶望のドン底につきおとし、読者をして号泣させはしません。Mrs. Dalloway は、五幕の芝居が終つたように感じ、外套や手袋やオペラ・グラスなどをかきあつめて劇場から街中へ出ていつてしまうのです。そして彼女は、街の、こまごまとした風景を、たんに風景として眺め、美しいと思い、私はこれらを愛すると やき、読者は哀感を感じず、という仕掛けです。

この様な心のカラクリは Mrs. Dalloway に見られるだけでなく、minor characters たちにも勿論あります。

例へば、始めの方に少し出る Mrs. Dempster は、自分の一生が a hard life であつたと思う。

しかし彼女は、どの様に hard であつたかということをも具体的に考へ、描写して、それを聞くもの、あるいは読むものに、その暗らさや、つらさを知らせ、沈鬱な気持ちにさせたり、憤らせたりするか、或いは又、その様な hard life をよくみつめ、どの様な行動によつて、そこから逃がれるかを考へて、読者の支持と拍手を期待するかわりに、たんに a hard life であつたと思うだけです。そして、そこに来た少女に the kiss of Pity をしてほしいと思うのです。しかし、それも、たんに思うだけで、本当にキスしてくれとは頼みません。行動には移らないのです。それどころか、

Carrie Dempster had no wish to change her lot with any womans in Kentish Town! (P. 36)

とさへ思うのです。つまり現状をそのまま肯定しようと思ふのです。しかしそれは自分の心をいつわることです。

But, she implored, Pity. Pity, for the  
loss of roses. (P. 36)

と彼女は哀願します。しかし矢張り行動には移りません。人間は所詮孤独であり、おたがいの間の communication は不可能である、だから、Pity を人間にもとめても無駄だ、それよりも風景へ、という作者の人生観が、

But, she implored, Pity. Pity, for the  
loss of roses. Pity she asked of Maisie  
Johnson standing by the hyacinth beds. (P. 36)

という文のつながりの中に現われていわしないでしょうか。たんに Pity を求めるだけなら、Maisie が何処に立っているかということは重要ではないのです。しかも standing by the hyacinth beds という句は、主文とほとんど同じ長さです。つまり、この句は、主文のあとのたんなるツケタリではなく、Mrs. Dempster の目が、そして心の重心が、Maisie から花に、つまり、人間に Pity を求めようとするところから、自然の風景に慰さめを求める方向に移ることを現わしています。上の文が、行が變わつて、

Ah, but that aeroplane! (P. 36)

と続き、以下飛行機からの風景などになることも Mrs. Dempster の心を上の様に考へうる支へにはならないでしょうか。

Mrs. Dalloway たち、Virginia Woolf の人物は、現実を正

確に認識することにより、現実の暗さをはつきり知り、それを四つにとりくむことを恐れ、現実の美しい断片である風景に逃避する、ということについてすでに述べました。彼女らの現実からの逃避は眼前の風景にのみでなく、過去の思い出にもなされます。

*Mrs. Dalloway* に於ける時間の経過は、実際にはたった一日です。しかし、そこには、なんと過去の思い出の多量であることか。*Mrs. Dalloway* も、その他の人物も、すぐに長い長い思い出にふけりだします。一体、思い出にふける、ということは、どの様なことを意味しているのでしょうか。

昔思ふ草の庵の夜の雨に

涙なそへそ山ほととぎす

矢張り『新古今』でこの様な歌があります。昔を思うのは、この様に、草の庵、夜、雨、といつたわびしい、孤独な時、そして、現実に行動していない時、しようという意欲のない時に多いのではないのでしょうか。そして

かへり来ぬむかしを今とおもひ寝の

夢の枕ににほふたちはな

ながらへはまたこの頃やしのはれむ

うしと見し世ぞ今は恋しき

といつた歌に見られるように思い出は、みな楽しく美しいものです。だから現実を生きぬく力をもたないものは、思い出の世界に逃がれるのです。

... women live much more in the past  
than we do ...

(P. 77)



と Peter は Clarissa のことをいいますが、そういう Peter だつて五十歩百歩ではないでしょうか。

Mrs. Dalloway は過去のみでなく未来にも逃がれます。しかし、この未来は、現実とかかわりあい、現実を動かす力のある未来ではなく、過去と同じく、美しい哀感に満ちたものにすぎません。彼女が死んだあとの未来図は、例えば、

all this must go on without her . . .  
somehow in the streets of London, on the  
ebb and flow of things, here, there,  
she survived, Peter survived, lived in  
each other . . . . (P. 10)

といった具合です。

Mrs. Dalloway は、現実の美しい破片を眺め、また、その様な美しい破片の溢れている過去の思い出と未来の幻想に生きて、現実には執着せず、行動しません。このような態度はたんに Mrs. Dalloway やその他の人物のものであるのみならず、結局人間とはその様なものであり、その様に生きるより仕方がないのではないかと作者がいつているように思います。

Mrs. Dalloway の意識の流れを描き、彼女の目を通じて眺め、彼女の心で感じているうちに、時計が鳴る、とか、車が通るとか、といった手段により（註4）、彼女の全然知らない人の意識の中に入つて行く。Mrs. Dalloway はその人物によつて風景の様に眺められるか、あるいは、全然眺められもしない。つまり、Mrs. Dalloway を含めて、各人物がみな風景の様に眺められ描かれているのです。人物は自分でドンドン行動するというわけにはいかないのです。考へるといふことさへ、まるで自由に、自分自身でやっているの

ではないかの様に、彼らが考へていると、 so it seemed to her, she thought, walking on といった文句によつて彼らは外から規正されます(註5)。Woolfは、これらの人物の中に入つていつて一緒に行動するようなことはなく、外から、美しい風景の様に眺めているのです。Arnold Kettleは、*To the Lighthouse* について

Virginia Woolf composes her novel very  
much as a painter ..... composes a picture.①

といつておりますが、*Mrs. Dalloway* は *To the Light-house* より動きが多いため、Picture とはいいいにくいけれども、小説を作る態度としては、Picture を作るように、といつてもよいのではないのでしょうか。

現実の重圧を押し返すために、行動に移ることをしないで、現実の美しい破片を眺めることと、過去の思い出と、未来の幻想にふけることとに逃がれる *Mrs. Dalloway* は、結局、どうなるのでしょうか、その運命を端的に現わすものは、*Mrs. Dalloway* の double である *Septimus* の死です。風景の美しさに逃れうるうちはよいけれども、それは、結局は死にいたる道です。*Septimus* は自殺する直前に、次ぎの様に思います。

He did not want to die. Life was good.

The sun hot. Only human beings? (214)

*Septimus* も死にたくはないのです。人生は善いもので、自然の風景は美しく、心地良いのです。しかし人間を嫌うもの、つまり、現実との格闘を嫌い、情に逃がれるものは、死にいたるより仕方がないのです。

Septimus が死んだことを知った Mrs. Dalloway は、死は defiance であり、an attempt to communicate がある、と思います。Mrs. Dalloway は現実の中で行動し、何ものに挑戦し、communication によつて孤独から逃がれる、ということが出来ないために、死の中に於いてそのことが可能だと信ずるのです。だから Septimus が自殺したことを、よろこばしいと感じるのです。

Fear no more the heat of the sun. (267)

Mrs. Dalloway は死をおそれない、といいます。そう確信した彼女が、Peter の方に近づいて行くと、Peter は次ぎの様に感じます。

What is this terror? what is this ecstasy?  
he thought to himself, what is it that fills  
me with extraordinary excitement?

It is Clarissa, he said.

For there she was. (279~280)

死をおそれなくなつた Mrs. Dalloway は、Peter をこの様に恍惚たらしめます。ここで、この作品は終るわけですが、Mrs. Dalloway は本当に死にうち勝つたのでしょうか。死には embrace があると思う彼女は何故、自殺しないのでしょうか。

Intolerable な人生を生きぬくために、行動せず、ただ美しい破片を眺め、過去と未来の幻想に生きる Mrs. Dalloway は、死に対しても矢張り行動せず、誰れかが自殺したということを引き、死の中には embrace があると想像し、窓から向いの家の老婆を眺め、その姿に力を感じ、もう今は死をおそれないと思う。しかしそれは彼女の頭の中に一時だけ

生じた幻想ではないでしょうか。Septimus できへ、死にたくはない、と考へます。ましてや、彼女が見た老婆は、お向かえさんは、どんちゃん、Party で本当に楽しそうだ、本当に世の中は楽しい、ああ、あそこでおいしそうに、大きなトンカツをくつつている。ああ死にたくない、死にたくない、などと案外思っているのではないのでしょうか。

James Hafly の、

Throughout the novel, Clarissa has been moving toward the same self-effacement.

*The Glass Roof*, p.64)

という言葉や、David Daiches の、

Is there not, one asks, a certain overrefinement here, has not reality been whittled down to almost nothing?

*Virginia Woolf*, p.77)

という相当手厳しい批難や、Arnold Kettle の、

the alternative direction of Virginia Woolf, the development of a cult of sensibility, inadequately based on the realities of the social situation, was likely to lead nowhere very useful at all.

(An Introduction to the English

Novel, vol II, p. 110)

という、それにもまさるともおとらない厳しい批判は、みな、Virginia Woolfの人生観が、現実から目をそむけたものであること、そしてそのような生き方は、結局は、自己を抹殺する方向であるため、の批判です。

このレポートでは、そのような人生観の構造について考へて見ました。すなわち、Mrs. Dallowayは美しい自然の風物の溢れている、現実の瞬間や、未来や過去の幻想に逃がれ、死や孤独にうちかとうと考へます。しかし、それは所詮ため、死や孤独に結局は屈服するより仕方ありません。つまり、この作品に現われている美しい image の背後には常に死と孤独がひそんでいるのです。だからこの作品を読むものは、George S. Fraser のいうように、哀感を感じるというわけです。

僕が、この Mrs. Dalloway を読んだ時に、西行の次ぎの歌が頭に浮かんだのも自然ではないでしょうか。

ねがはくは花のもとにて春死なむ

そのきさらぎの望月の頃

(註)

1 James Hafley, *The Glass Roof* (Univ. of California Press), 1.

2 *Ibid.*, 3.

3 *Ibid.*, 67. “He opened the big blade of his pocket-knife.’ Simply, Peter protects his individuality from society and refuses to surrender it; yet in doing so, he is given

himself up to the society that he fears".

4 David Daiches, *Virginia Woolf* (New Directions Books, Norfolk, Connecticut), 67.

5 *Ibid.*, 64.